

## 七夕伝説

かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白きを見れば 夜ぞふけにける

中納言家持

### [現代訳]

七夕の夜、かささぎが群れをなして天の川に橋をかけ、織女を牽牛のもとへ渡したという、中国の伝説の橋を思わせるような、この宮中の階段に、真っ白な霜が降りて、その白さを見ると、夜もふけたようだなあ。

鶺鴒はカラス科で、背中から尾にかけては黒いが、肩から胸腹は白い鳥。冴え渡った冬の夜空の下、武人であった大伴家持(おおとものやかもち)が御所の夜警にあたっているときにでも、白い霜の降りた階段を見て、七夕伝説の鶺鴒の橋を連想したのでしょうか。宮中や神社の階段を「階」と書いて「はし」と読み、敬称は「御階」(みはし)とといいます。宮中を天上界になぞらえることは多く、階と橋が同音であることから、この見立てがしやすかったのでしょうか。「見立て」は漢詩の技法です。

軍歌「海ゆかば」の歌詞は万葉集にある家持の長歌の一節。令和という元号の由来となった万葉集の梅花の歌三十二首の序文「初春令月 気淑風和～」(初春の令月にして気淑く風和ぎ～)は、父・大伴旅人(おおとものたびと)の作。なんだか、現代とご縁のある親子です。

山陽小野田かるた協会 久保久美子